The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポスト社会主義の都市と＜都市的なるもの＞ : モンゴル、ウランバートル市における人類学的問題
Author(s)	西垣, 有
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33989
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕ポスト社会主義の都市と〈都市的なるもの〉：
モンゴル、ウランバートル市における人類学的問題

学位申請者　　西垣　有

本論文の目的は、第一に、モンゴル国の首都ウランバートル市とウランバートル市をとりまく人々やものたちの集合を人類学的問題として問うこと、第二に、人類学的問題を問うということがどのような事柄なのかについて、一定の見通しを与えることである。ウランバートル市が一つの都市として形を成し、多くの人々やものたちがそこに巻き込まれ、われわれの前に一つの問題として問題化することを人類学的問題として引き受け、展開することを通してこの目的は果たされる。

第一章ではまず本論文が問う「人類学的問題」がどのような問題かを確認する。人類学的問題とはポール・ラビノウがミシェル・フーコーの『言葉と物』における人間の誕生と終焉という問題を引き継ぎ、それを後期フーコーの生権力論的な観点から捉えなおしたものである。フーコーが終焉したという 19 世紀の「人間 Man」のあとに残った「人類 anthropos」の構築を問題にするのが人類学的問題である。論集『グローバル・アセンブラージュ』はこのようなフーコー-ラビノウ的な問題意識をカール・ポランニーとハンナ・アーレントの議論も含めたより拡張的なものとして捉えなおし、今日のグローバル化における人間のあり方の変容を問おうとする。本論文はこのような問題意識を共有すると同時に、人類学的問題が問われる場所を問題とする。

第二章は、まさにその人類学的問題が問われる場所としての「都市」の問題である。都市がかつての都市人類学以来どのように問題にされてきたかを確認したのち、関根康正の〈都市的なるもの〉およびアニク・ホメルズの「都市のオブデュラシー」という二つの研究動向に対して本論文を位置づける。続いて、本論文で問題とするウランバートル市とそのゲル地区がどのように形成されてきたかを確認する。

つづく三章、四章、五章では、一章と二章でそれぞれ問題にした人類学的問題とその場所とを分ちがたく結びついたものとして考察していく。

第三章ではポランニーの『大転換』の議論をポスト社会主義の現代へと転用する「第二の大転換」の議論を検討する。モンゴルでは 90 年代初頭「ショック療法」とも言われた市場経済への急激な移行が目指されプライバタイゼーションがすすめられたが、90 年代後半以降むしろ移行は緩やかになっている。2003 年、プライバタイゼーション政策の最後の目玉としてかつて国民規模で反対されていた土地の私有化が開始された。本章では土地を私有化の対象にすることがどのようにして可能となり、私有の対象としての土地が住民の土地へのかかわりのなかにどのように書き込まれているかを見るとともに、緩やかな移行における私有化が再埋め込みの動きと対抗するというよりはむしろ宙吊りにされていくプロセスとして捉えられることを示す。

第四章は近年の市民社会論の転回についてである。アーレント、ハーバーマス以来の市民社会論は NGO 活動やアソシエーション、第三セクターに注目してきたが、メアリー・カルドーはそのようなかたちのグローバルな市民社会の一つの末路としてネオリベラルな市民社会像を提示する。モンゴルにおいても 2000 年代の緩やかな移行下において、貧困問題や環境問題など住民の福祉をターゲットとした開発が目につくようになった。本章ではウランバートル市のゲル地区における住民参加型の開発の展開をとりあげ､そこでどのようにコミュニティが作られるかを考察する。そこでは社会主義時代以来の公共性の概念がコミュニティ概念として転用され、公的なものと私的なものの間にさしはさまれる。市場経済化とコミュニティづくりが相補的に可能となるようなネオリベラルなコミュニティづくりは開発上の言説と装置を介して公的領域への現れと私的領域との区別を強化する諸実践は区別される。

第五章はフーコーとラビノウの都市の「環境」の整備のされ方をめぐる生権力論が「グローバル・アセンブラージュ」においてどのように展開するかを問題とする。アンソニー・ギデンズが再帰的近代化論のなかでとりあげた存在論的セキュリティにおける環境世界 Umwelt 概念とフーコーのいう生権力的なセキュリティにおける環境 milieu 概念を比較検討し、ウランバートル市の都市環境問題に対するコンパクトシティ計画とそのパイロットプロジェクトが住民の生と都市の環境をどのように捉え、整備しようとしているのかを明らかにする。

最終章となる第六章では、以上の議論を踏まえ、フーコー、ラビノウ、コリアの議論における人類学的問題のねじれの変形可能性を検討する。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　西垣　有　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教　授	中川　敏
	副 査	教　授	栗本　英世
	副 査	准教授	白川　千尋
	副 査	准教授	森田　敦郎

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、現代の人類学的思想の脈絡においてモンゴル国のウランバートル市とそれを取り巻く人々そしてモノたちの集合を分析することである。本学位申請者は、論文全体を通して、現代のウランバートルは、理論の脈絡で把握しえない状況（「ねじれ」「宙吊り」）であることを指摘した上で、それらの民族誌的事実に基づいて理論のさらなる発展を志す。当論文は真に人類学的な構成をとっていると言えよう。

著者は、第１章と第２章で問題と場所の設定を行なった後、第３章から第５章にかけて三つの理論的枠組とそれに対応する三つの民族誌的側面を分析していく。

第３章において、著者は、1990年代以降のモンゴルのポスト社会主義の動きを丁寧に追う。とりわけ土地の私有化に関する法の制定の歴史を詳細に辿り、さらにフィールドワークに基くウランバートルの土地の状況を描く。その上で、彼は、ポラニーの『大転換』の議論に基いた、これまでの諸議論が不十分であることを指摘する。第４章は、ウランバートルにおけるＮＧＯ活動に焦点をあてる。モンゴル語の知識を生かして、キーワードの翻訳の変遷を辿りながら、「公共」「公共性」の概念がどのように変わっていったのかを分析する。そして、ウランバートルの状況が、これまでの（アーレントなどの議論に基いた）市民社会論ではとらえ切れないことを実証していく。第５章は、ウランバートルの都市計画をフィールドワークに基いて詳細に見ていく。じっさいの計画立案者、計画された場所の人びと、そして立案者と人びとを繋ぐＮＧＯの姿が生き生きと描かれる。その中で、著者は、フーコーやギデンズの生権力論・都市論を批判していくのである。

第６章で、著者は、これまでの議論をまとめた上で、さらなる人類学的な理論の発展を示唆する。

著者は、詳細なフィールドワークに基く民族誌を、さまざまな理論的な枠組を用いて読み解いていく。その中にポスト社会主義という時代のウランバートルという都市を人類学的に描くことに成功している。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。